

【個人研究】

## 大学生におけるふれ合い恐怖的心性と 心理的ストレス反応の関連性

石原 俊一\*

### Relationship between the commu-phobic tendency and psychological stress responses in Japanese university students

Shunichi ISHIHARA

The purpose of the present research was to examine the relationship between the “commu-phobic tendency” and the psychological stress responses among contemporary university students. One hundred twenty six university students (39 males, 87 females) completed questionnaires based on the commu-phobic tendency scale, stress self-rating scale, and stress response scale (SRS)-18.

Factor analysis of the commu-phobic tendency scale produced four factors: “interpersonal refusal,” “desire for isolation,” “superficial relationships,” and “interpersonal over-adaptation.”

The results of multiple regression analyses showed that stress responses such as depression, anxiety, anger, emotional confusion, withdrawal, autonomic nervous acceleration, and physical fatigue were positively correlated with interpersonal refusal, desire for isolation, and superficial relationships.

These results suggest that “commu-phobic adolescents” who withdraw from interpersonal relationships showed a high level of psychological stress responses.

**Key words:** commu-phobic tendency, anthropophobic tendency, psychological stress responses, adolescents

ふれ合い恐怖的心性, 対人恐怖心性, 心理的ストレス反応, 青年期

### 【目 的】

対人恐怖症は、思春期・青年期に非常に多く見られる神経症の一種であり（永井，1994），その症状は、対人緊張・赤面恐怖・視線恐怖・表情恐怖・醜貌恐怖・自己臭恐怖など幅広く、いずれも対人状況において生じる症状である（森田，1932）。

対人恐怖の発症メカニズムについて、近藤（1964）は、日本人の特徴的考え方として、お互いに相手を気遣い、配慮する心が要請されている「配

慮的要請」とし、一方、欧米人の特徴的考え方として、個人としての自己主張が要請される「自己主張的要請」と名付けた。日本社会の中ではこの2つの要請において葛藤が生じやすいことから、この葛藤を対人恐怖の発症原因としている。また、河合（1975）は、対人恐怖の問題意識を倫理感の問題としてとらえ、欧米における個の倫理に対して、日本においては場の倫理が重視されており、双方の倫理感の葛藤が対人恐怖の問題意識に結びついているととらえている。さらに、近藤（1980）は、時代的変遷の観点から対人恐怖を考察し、時代的変遷が見られる対人恐怖症の症状の中でも、圧迫感・不安・緊張についてはいかなる年代においても

\* いしはら しゅんいち 文教大学人間科学部心理学科

共通して認められていると論じている。この共通した症状について、丸山・児玉・深沢（1982）は、対人恐怖症状の始源的な形態であるとしている。

また、対人恐怖の症状を幅広い意味で解釈することにより、人見知り、過度の気遣い、対人緊張などは、健康者においても認められる心理的傾向である対人恐怖の心性として捉えるようになった（永井，1987，1994）。

対人恐怖の心性の構造については、対人状況における行動・態度、関係的自己意識、内省的自己意識の3つの次元が報告されている（永井，1994）。対人状況における行動・態度の下位構造として、第1因子は他者とうちとけた行動の困難さ、第2因子は緊張感の高まり、第3因子は視線の問題となっており、関係的自己意識においては、他者との関係において、関係を確定できないもの、加害的な関係、被害的な関係の3つの特徴があるとし、内省的自己意識の第1因子は自己の不安定さと劣等感、第2因子は自己統制の弱さ、であるとの構造を明らかにしている。

一方、臨床的な立場から、対人恐怖の心性と自己愛傾向の関連性に関する研究（清水・海塚，2002）が報告されており、自己愛は、DSM-IVのなかで診断基準として記述されているもののほかに、青年期特有の人格的特徴として、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定感、その肯定感の維持欲求を有する傾向にあるとされている（小塩，1998）。岡野（1998）は、恥の感覚にとらわれやすく、対人恐怖を経験しやすい人は、他者承認欲求あるいは他者評価欲求が高く、それに圧倒される形で対人場面での恐怖感が生まれると論じ、これらの観点から、恥の病理と自己愛人格障害との関連性について論じられるようになった。以上のように、現代的な精神分析の視点から、対人恐怖のもつ性格構造は自己愛の病理として捉えられるとしている。しかしながら、岡野（1998）は、すべての対人恐怖者が自己愛的であるとは必ずしも言えないとも考察している。このことから、清水・海塚（2002）は、対人恐怖の心性と自己愛傾向の関連性については一様ではなく、双方が複雑に関係していることを示唆している。

また、青年期の自己評価と対人恐怖の心性の関連性から、公的自己意識の高い青年期において、外的な基準に自己を一致させることで自己評価を高く維持しようとする欲求が生じる（岡田・永井，1990）。一方で、社会的規範に対する反抗や他者などの安定した受容関係の不確立（村瀬，1983）などから、自己評価を高めることが困難で、低い自己評価のもとで対人恐怖の心性が生じやすいと考えられる。

さらに、青年期の友人関係における自己愛傾向と自尊感情の関連性について、深い友人関係を自己報告する青年ほど自尊感情が高く、広い友人関係を自己報告する青年ほど自己愛傾向が高い傾向にあると報告されている（小塩，1998）。すなわち、友人関係の深さと自尊感情の関連性については、青年期の親密な友人関係が心理的適応に影響を及ぼすし、友人関係の広さと自己愛の関連性については、特定の相手と接するよりも多くの友人と接している方が、自己に対する肯定感を維持しやすいと考えられる。さらに、自己愛の傾向は、他者からの評価によって容易に自信が崩壊するため、現代青年は、自己の肯定的評価が容易に崩壊する可能性のある深い対人関係を回避し、広く表面的につき合う傾向にあると考えられる（小塩，1998）。以上のことから、自己愛が高く、広く浅い友人関係を示す現代青年は、他者からの評価によって容易に崩壊する不安定な自己評価のうえに成り立っていると考えられよう。

近年、対人恐怖と同様な症状を訴えるが、その心理的背景が異なる対人恐怖様症状が多く報告されるようになった。臨床場面からも、従来の対人恐怖とは異なる対人不安や対人緊張を示しながら、訴えの内容が対人恐怖と類似している症状を示す一群が報告されている（福井，2003）。また、最近の大学生における対人恐怖の心性の症状として、雑談場面などから単なる知り合いを越えて対人関係が深まるような場面になると症状が発症するが、逆に形式的・表面的な対人関係場面では困難を感じない症状を「ふれ合い恐怖」と呼んでいる（山田・安東・宮川・奥田，1987）。

ふれあい恐怖を有する者は、対人接触の困難さの訴えは対人恐怖と同じであるにもかかわらず、

対人恐怖の特徴とされた赤面、視線、自己臭、醜貌恐怖などの症状によって対人回避の理由にしないことが報告されている(山田・安東・宮川・奥田, 1987)。ふれ合い恐怖を持つ者の特徴として、情緒的な場面を嫌うこと、自発的な来談が少ないことなどが挙げられており(山田, 1989)、これらの特徴からふれ合い恐怖の症状として、自分自身の内面の情緒状態に目を向けることを回避し、自分自身の葛藤から目をそむける傾向があり、内省の低さと関連することが示唆される(岡田, 1993)。

また、現代青年における特徴として、表面的な楽しさを求めながらも他者からの視線に気を遣う、自己および対人関係への関心から退却する特徴が挙げられ、前述した広く浅い友人関係をとる傾向と併せた特徴が、健全な青年を中心に顕著に認められることから、現代青年一般にふれ合い恐怖と共通する心理的傾向があることを推定できるとし、これを「ふれ合い恐怖の心性」と呼んでいる(岡田, 1993)。

従来の対人恐怖については自己愛、自己評価、孤独感などさまざまな研究がなされており、また、近年、「ふれ合い恐怖」においても対人恐怖の心性との比較、友人関係のあり方などの研究がなされているが、いずれも特定の下位概念との比較検討にとどまっており、ふれ合い恐怖がいかなる心理的反応と関連性があるのかということについて明らかにされていない。そこで本研究では一般大学生を対象とし、「ふれ合い恐怖の心性」と心理的ストレス反応における関連性を検討することを目的とした。

## 【方法】

**調査対象者:** B大学学生男性39名(平均年齢20.7歳, SD=0.9)、女性87名(平均年齢20.6歳, SD=0.73)、計126名(平均年齢20.63歳, SD=0.8)を対象とし、質問紙を実施した。

**質問紙: ふれ合い恐怖尺度** ふれ合い恐怖尺度は、岡田(2002)の作成したふれ合い恐怖症に特有とされる対人的困難の特徴に関する26項目の尺度のうち、因子分析で不採択となった3項目を除外した23項目をふれ合い恐怖尺度とした。得点が高い

ほどふれ合い恐怖的な傾向が高いとし、「非常にそうでない」から「非常にそうである」の5段階評定で実施した。

**大学生用ストレス自己評価尺度** 尾関・原口・津田(1991, 1994)の大学生用ストレス自己評価尺度を用いた。本尺度はストレス反応35項目、ストレッチャー35項目、認知的評価15項目、コーピング14項目、ソーシャル・サポート10項目、ユーモア10項目の全119項目からなるが、本研究ではストレス反応尺度の35項目のみ抜粋して用いた。下位尺度は情動的反応(抑うつ・不安・怒り)、認知・行動的反応(情緒的混乱・引きこもり)、身体反応(身体的疲労感・自律神経系の活動性亢進)の7下位尺度からなり、「あてはまらない」から「非常にあてはまる」の4段階評定で実施した。また、ストレス反応尺度の下位尺度である抑うつ、不安、怒り、情緒的混乱、引きこもり、身体的疲労感、自律神経系の活動性亢進の7尺度について粗点の合計を各尺度の得点とした。

**Stress Response Scale-18** 鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野(1997)のStress Response Scale-18(以下SRS-18)を使用した。SRS-18は、従来の代表的なストレス反応尺度が、①項目数や下位尺度が多く複雑である、②健常者が日常で経験することの少ない項目が含まれている、③広い年齢層に共通して適用することのできる尺度が少ないなど、様々な問題点を抱えていることから、幅広い年齢層を対象として、簡便で、かつ日常多く経験される心理的ストレス反応の測定が可能な尺度を作成することを目的として開発された尺度である。抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力の3下位尺度からなり、「全くちがう」から「その通りだ」の4段階評定で実施した。また、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力の3下位尺度について粗点の合計を各尺度の得点とした。

**手続き:** 心理学系の授業にて質問紙を配布し、同意が得られた対象者に対し回答を求め、その場で回収した。なお、データ収集時期は2008年9月であった。

## 【結果】

### ふれ合い恐怖尺度の因子分析

ふれ合い恐怖尺度の全23項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値1.0以上を基準とし、4因子が抽出された。第1因子は、“友だち数人でいる場面は苦手だ”や“できることなら人とあまり関わりになりたくない”どの項目が含まれることから対人拒否因子（ $\alpha=.92$ ）、第2因子は、“友達と一緒に食事をするのは好きでない”や“一人で趣味に没頭したい”などが含まれることから孤立願望因子（ $\alpha=.81$ ）、第3因子は“自分の本音

を人に見せたくない”や“人という場面で、言葉がなくなってしまうか”と不安になる”などが含まれることから表面的対人関係因子（ $\alpha=.66$ ）、第4因子は“他人とすぐ打ち解けることができる”や“人という、イヤなことを頼まれる”などが含まれることから、対人過剰適応因子（ $\alpha=.43$ ）と命名した。因子分析の結果をTable 1に示した。

以上の結果は、同一の尺度を用いた岡田（2002）の研究と異なっているが、この研究では臨床群と非臨床群を調査対象にしており、双方の得点を用いて因子分析を行ったのに対し、本研究は一般大学生を対象に実施したため対象群の性質の違いから尺度の下位構造が異なると考えられる。

Table 1 ふれ合い恐怖尺度における因子分析結果(主因子法 バリマックス回転 N=126)

	対人拒否	孤立願望	表面的対人関係	対人過剰適応	共通性
友だち数人でいる場面は苦手だ	0.70				0.64
他人と親しくなるのはうっとおしい	0.66				0.65
友だちと2人きりでいる場面は苦手だ	0.66				0.48
他の人は自分を受け入れてくれない	0.66				0.55
できることなら人とあまり関わりになりたくない	0.64				0.63
知り合いに道や廊下であったとき挨拶するのが苦痛だ	0.62				0.51
人と雑談するのは苦手だ	0.58				0.69
他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	0.56				0.48
人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	0.55				0.56
友だちと一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	0.53				0.56
人としても話題がなくて困ることが多い	0.53				0.40
友だちと一緒に食事をするのは好きでない		0.83			0.83
できれば食事は一人でとりたい		0.79			0.78
昼食は友だちと一緒に食べるのが好きである		-0.78			0.67
大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだ		-0.58			0.54
人と関わると、相手に自分の弱みを握られそうな感じがする		0.48			0.55
一人で趣味に没頭したい		0.36			0.29
人という場面で、言葉がなくなってしまうか と不安になる			0.68		0.49
他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする			0.60		0.42
自分の本音を人に見せたくない			0.56		0.40
他人とすぐ打ち解けることができる				0.58	0.47
自分は人付き合いがよいと思う				0.51	0.45
人という、イヤなことを頼まれる				0.42	0.40
因子寄与	5.13	4.05	1.90	1.35	12.43
寄与率(%)	22.31	17.59	8.26	5.87	54.03

大学生用ストレス自己評価尺度とふれ合い恐怖の関連性

ふれあい恐怖尺度における各心理的ストレス反応尺度に対する関連性を検討するため、大学生用ストレス自己評価尺度の各下位尺度の粗点の合計を従属変数とし、因子分析によって抽出されたふれ合い恐怖尺度における4因子の因子得点を独立変数とする重回帰分析をそれぞれ従属変数ごとに行った。

抑うつ尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.465$ ,  $R^2=.216$  ( $F(4,121) = 8.35$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性、表面的対人関係において正の関連性の有意傾向がそれぞれ認められた。その結果をTable 2に示す。

Table 2 抑うつ尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	1.318	4.180	***
孤立願望	0.801	2.649	**
表面的対人関係	0.657	1.955	+
対人過剰適応	0.111	0.325	

+  $p < 0.10$  \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

不安尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.378$ ,  $R^2=.143$  ( $F(4, 121) = 5.06$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 3に示す。

Table 3 不安尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数:	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.301	3.520	***
孤立願望	0.183	2.163	*
表面的対人関係	0.059	0.694	
対人過剰適応	0.024	0.282	

+  $p < 0.10$  \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

怒り尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.450$ ,  $R^2=.202$  ( $F(4, 121) = 7.67$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 4に示す。

Table 4 怒り尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.276	3.337	***
孤立願望	0.305	3.739	***
表面的対人関係	0.075	0.913	
対人過剰適応	0.103	1.266	

+  $p < 0.10$  \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

情緒的混乱尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.497$ ,  $R^2=.247$  ( $F(4, 121) = 9.92$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 5に示す。

Table 5 情緒的混乱尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.312	3.883	***
孤立願望	0.316	3.979	***
表面的対人関係	0.128	1.604	
対人過剰適応	-0.029	-0.362	

+  $p < 0.10$  \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

引きこもり尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.440$ ,  $R^2=.194$  ( $F(4, 121) = 7.27$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 6に示す。

Table 6 引きこもり尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.311	3.744	***
孤立願望	0.272	3.318	***
表面的対人関係	0.044	0.538	
対人過剰適応	0.012	0.146	

+  $p < 0.10$  \*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$  \*\*\*  $p < 0.001$

身体的疲労感では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=.541$ ,  $R^2=.293$  ( $F(4, 121) = 12.52$ ,  $p < .001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 7に示す。

Table 7 身体的疲労感を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.309	3.973	***
孤立願望	0.389	5.051	***
表面的対人関係	0.112	1.459	
対人過剰適応	0.011	0.145	

+ p &lt; 0.10 \* p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01 \*\*\* p &lt; 0.001

自律神経系の活動性亢進尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=0.363$ ,  $R^2=0.132$  ( $F(4, 121) = 4.59$ ,  $p < 0.002$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 8に示す。

Table 8 自律神経系の活動性亢進尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.219	2.538	*
孤立願望	0.211	2.472	*
表面的対人関係	0.137	1.601	
対人過剰適応	-0.039	-0.461	

+ p &lt; 0.10 \* p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01 \*\*\* p &lt; 0.001

#### SRS-18とふれ合い恐怖ふれ合い恐怖の関連性

ふれあい恐怖尺度におけるSRS-18の各下位尺度に対する関連性を検討するため、SRS-18の各下位尺度の粗点の合計を従属変数とし、因子分析によって抽出されたふれ合い恐怖尺度における4因子の因子得点を独立変数とする重回帰分析をそれぞれ従属変数ごとに行った。

抑うつ・不安尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=0.502$ ,  $R^2=0.252$  ( $F(4, 121) = 10.17$ ,  $p < 0.001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性、対人関係不安において正の関連性の有意傾向がそれぞれ認められた。この結果をTable 9に示す。

Table 9 抑うつ・不安尺度を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.296	3.694	***
孤立願望	0.340	4.294	***
表面的対人関係	0.136	1.717	+
対人過剰適応	0.034	0.429	

+ p &lt; 0.10 \* p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01 \*\*\* p &lt; 0.001

不機嫌・怒り尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=0.450$ ,  $R^2=0.203$  ( $F(4, 121) = 7.69$ ,  $p < 0.001$ ) であり、対人拒否、孤立願望、対人関係不安において有意な正の関連性がそれぞれ認められた。この結果をTable 10に示す。

Table 10 不機嫌・怒りを従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.247	2.990	***
孤立願望	0.182	2.225	**
表面的対人関係	0.270	3.299	***
対人過剰適応	0.130	1.591	

+ p &lt; 0.10 \* p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01 \*\*\* p &lt; 0.001

無気力尺度では、重相関係数および決定係数は、それぞれ $R=0.554$ ,  $R^2=0.307$  ( $F(4, 121) = 13.42$ ,  $p < 0.001$ ) であり、対人拒否、孤立願望において有意な正の関連性が認められた。この結果をTable 11に示す。

Table 11 無気力を従属変数とした重回帰分析結果

独立変数	$\beta$	$t$	$p$
対人拒否	0.382	4.961	***
孤立願望	0.332	4.357	***
表面的対人関係	0.119	1.560	
対人過剰適応	0.019	0.244	

+ p &lt; 0.10 \* p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01 \*\*\* p &lt; 0.001

## 【考察】

以上の結果から、ふれ合い恐怖における下位尺度である対人拒否・孤立願望因子と、心理的ストレス反応である、不安、不機嫌、怒り、無気力、情緒的混乱、引きこもり、身体的疲労感、自律神経系の活動性亢進において一貫して正の関連性が

認められた。さらに表面的対人関係因子と不機嫌・怒りにおいても正の関連性が示された。

ふれ合い恐怖心性は、抑うつ、不安、怒りなどのネガティブな情動的反応を高めることが示唆された。抑うつの発生については、否定的な出来事の後自己に注目することにより否定的な感情が高まり、抑うつ傾向を生じさせると考えられる（伊藤・村瀬・吉住・村上，2008）。さらに、対人恐怖の心性とふれ合い恐怖の心性における抑うつ傾向の水準を比較すると、対人恐怖の心性では、自己や他者への関心の高まり、その自己意識がより否定的であると自覚されたことにより抑うつ傾向がより高くなると考えられる。一方、ふれ合い恐怖の心性では、自己や他者に意識を向ける傾向や自己の内的不安を感知する傾向が比較的強く、対人恐怖の心性に比べ抑うつ傾向が低くなると考えられる（岡田，1993，2002）。しかし、対人恐怖の心性と比較して抑うつ傾向が低くなることは、ふれ合い恐怖と抑うつの関連性を否定するものではなく、本研究で見いだされたふれ合い恐怖の心性と抑うつ傾向との関連性と一致するものである。

また、対人恐怖とふれ合い恐怖では、対人関係を回避するという点では類似しているが、対人回避の理由として身体反応を主訴とする対人恐怖に対し、ふれ合い恐怖は対人関係の接触の困難性を直接の悩みとしている点で異なっている。対人恐怖は人と人が顔見知りになる場面において発症し（山田，1989）、自己の未熟さを認識することへの反応として身体症状を引き起こすのに対し、ふれ合い恐怖は自分自身に関心が向くのではなく、対人回避をする場面や状況のあり方に関心が向き、悩みが発生すると考えられる（福井，2003）。対人恐怖とふれ合い恐怖のどちらも社会的場面において身体反応および悩みが発生しており、その発生によって心理的ストレス反応が引き起こされると考えられる。

また、ふれ合い恐怖心性における表面的対人関係因子と不機嫌・怒りの関連性については、ふれ合い恐怖の心性の特徴である、対人関係における表面上の付き合いを維持するため、不機嫌さや怒りなどの感情の表出を抑制することから、心理的ストレス反応が上昇したと考えられる。表面上の付

き合いを維持しようとすることは、一見すると相手との関係を積極的に友好にしようとするポジティブ関係コーピングと捉えることができるが、現代青年は、対人関係においてポジティブ関係コーピングやネガティブ関係コーピングを行うよりも、何もしないで対人ストレスをコーピングしようとする解決先送りコーピングを用いることで、互いに傷つけあうことを回避し、友人関係が希薄であるにもかかわらず、その関係を良好に保つことができると考えられる（加藤，2001）。したがって、ふれ合い恐怖心性が高い者は、解決先送りコーピングを行うことで不機嫌さや怒りを抑制し、希薄で不安定ながら友人関係を維持しており、そのために心理的ストレス反応が上昇したと考えられる。

また、ふれ合い恐怖の心性が情緒的混乱・引きこもりなどの認知・行動的反応を上昇させる結果が認められた。このことは、ストレスフルな対人イベントにおいて、そのイベントを喚起した相手との親密性によってストレスコーピングの選択が異なり、心理的ストレス反応に影響を及ぼすと考えられる（加藤，2007）。すなわち、親密性が中程度であり親密化過程の初期の段階にある関係では、喚起された対人イベントに対してその関係を積極的に改善するポジティブ関係コーピングは用いられにくく、対人ストレスコントロール可能性は低い。一方、人間関係を放棄・崩壊するようなネガティブ関係コーピングを用いると、その相手に対する対人関係が悪化し、それによって友人関係において重要とされる精神的な支援が得られず、孤独感を感じ、心理的ストレス反応が増大すると考えられる。以上の観点から、ふれ合い恐怖について考察すると、ふれ合い恐怖は顔見知りからより親密な関係に発展する場面において困難を示し、対人関係において情緒的な深まりを欠いた関係性をとることから（山田，1989）、親密性が中程度の対人関係におけるストレスコーピング場面は、ふれ合い恐怖における症状の発生場面と同様であると考えられる。すなわち、対人ストレスに対して適切な対人ストレスコーピングが可能とならず、情緒的混乱・引きこもりなどの認知・行動的反応が上昇すると考えられる。これらの傾向は、ふれ合い恐怖の心性においても同様な反応が想定される。

さらに、ふれ合い恐怖と身体的疲労感・自律神経系の活動性亢進などの身体反応に関連性については、大学生の対人不安意識には、対人関係への緊張、大勢からの圧倒、気分の動揺などで構成されており(林・小川, 1981), 緊張と動揺は、自律神経系の活動の亢進を生じさせ、関連する身体的反応を増大させると考えられる。また、対人恐怖の心性とはふれ合い恐怖の心性には共通する部分がある(岡田, 1993)ことから、ふれ合い恐怖の心性においても身体反応と関連する可能性があり、本研究におけるふれ合い恐怖の心性と心理的ストレス反応における身体反応との関連性と一致するものと考えられる。

以上のことから、ふれ合い恐怖と認知・行動的反応、情動的反応、身体反応などの心理的ストレス反応との関連性が示されており、本研究におけるふれ合い恐怖心性と心理的ストレス反応の関連性も示唆される。現在までのふれ合い恐怖の心性研究において、心理的ストレス反応との関連について検討したものはほとんどなく、本研究の結果はふれ合い恐怖の心性について新たな見解を示すものとして意義のあるものである。しかしながら、本研究で用いたふれ合い恐怖尺度において、比較的信頼性の低い因子が認められた。したがって、ふれ合い恐怖およびふれ合い恐怖の心性の構造についてさらなる調査・研究を行い、その構造を明確にする必要がある。また、本研究で用いた尺度はふれ合い恐怖尺度であり、健常者を対象としたふれ合い恐怖の心性の尺度は作成されていないため、ふれ合い恐怖尺度における得点をふれ合い恐怖の心性として解釈したが、ふれ合い恐怖とふれ合い恐怖の心性を同一の尺度で解釈できるか否かについても今後検討する必要がある。

## 【引用文献】

福井康之(2003). 女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖 人間性心理学研究, 21, 187-197.  
林 洋一・小川捷之(1981). 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.  
伊藤 亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上 隆(2008).

現代青年における“ふれ合い恐怖の心性”と抑うつおよび自我同一性との関連 パーソナリティ研究, 16, 396-405.

- 加藤 司(2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.  
加藤 司(2007). 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証 社会心理学研究, 23, 152-161.  
河合隼雄(1975). 自我・羞恥・恐怖—対人恐怖症の世界から 思想, 62, 23-28.  
近藤章久(1964). 日本文化の配慮的性格と神経質 精神医学, 6, 13-22.  
近藤喬一(1980). 対人恐怖の時代的変遷—統計的観察— 臨床精神医学, 9, 45-53.  
丸山 晋・児玉和宏・小島 忠・深沢裕紀(1982). 対人恐怖の時代的変遷 臨床精神医学, 11, 829-835.  
森田正馬(1932). 赤面恐怖症(又は対人恐怖)と基療法 神経質, 3, 172.  
村瀬孝雄(1983). 青年の心理と対人恐怖 青年心理, 41, 673-682.  
永井 徹・岡田 努(1987). 対人恐怖の心性の構造に関する研究 日本心理学会第52回大会発表論文集, 534  
永井 徹(1994). 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析 サイエンス社  
岡田 努(1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖の心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.  
岡田 努(2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.  
岡田 努・永井 徹(1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.  
岡野憲一郎(1998). 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社  
小塩真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, 46, 280-290.  
尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰(1994). 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 健

- 康心理学研究, 7, 20-36.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 (1991). 大学生の生活ストレス、コーピング、パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4, 1-9.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬力也・坂野雄二(1997). 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖の心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 山田和夫(1989). 境界例の周辺—サブクリニカルな問題性格群— 季刊精神療法, 15, 350-360.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報)—ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究— 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23, 206-215.

## 【謝 辞】

本研究は、2008年度卒業生、熊田裕子さんの卒業論文の一部をまとめなおしたものです。熊田さんにご協力を頂き、ここに記して心より御礼申し上げます。